

1550年ポルトガル船が平戸に来航して日本との交易が始まった。その後紆余曲折があり1571年長崎の港が開かれ今年で450年となる。要塞化された岬の先端に教会が建てられ交易が始まり、その教会に向かって六つのキリシタン街が形成されました。ポルトガル人の若き歴史家ベビオ・アマロ氏の論文によると1598年の地図に出嶋の原形の砂州が表されているし、驚くべきことに早い段階から高麗人の街や遊女屋もできている。また、1597年2月に処刑された26聖人殉教の記念の26櫻や石の祭壇もできていた。1636年に出嶋が築造されるまでの65年間余りの長崎の町の様子は江戸時代初期の日本では想像もできないほど特殊な国際貿易都市でした。

やがて徳川家康が朱印状を発行するようになり1635年までに350隻以上の朱印船が東南アジア各国へ貿易のため渡航しました。それまでのポルトガル貿易に加えてベトナム、タイ、ルソン、台湾などの国々へ交易のため渡航しています。山田長政、荒木宗太郎、末次平蔵らの活躍の時代です。当時の長崎の街にはこれらの国の人々が行き交い、それぞれの国の文化や産物があふれていました。

そして偶然ですが1663年寛文の大火でその多くの焼き物や金属、ガラス類が焼け壊れ地中へ埋没したのです。最近ベトナム・ホイアンの日本人街で発掘され、その家に展示してあります焼き物のほとんどが長崎の街から発掘される焼き物と同じであります。当時の交流の深さが想像できます。また、その後のキリスト教禁止による徹底した迫害の歴史を考えると決して伝製品として残りえない十字架やメダイ、金の指輪、ガラスコップ、花十字のキリシタン瓦など多数のキリスト教関連遺物が発見されています。寛文の大火とキリスト教禁止により長崎奉行所は立山と西役所（県庁舎跡地）の二か所となります。長崎奉行は新旧交代の儀式をこの西役所でおくんちの時に行われたということです。幕末には西役所は海軍伝習所や医学伝習所として利用されました。

さて、先日の長崎県の発掘により長さ60m、高さ6~7mの圧倒的な存在感のある石垣が発見されました。同じ土地から花十字紋瓦、江戸時代の陶磁器が発見されていますが、発掘品があまりにも少ない。同じ高台にある高島秋帆邸跡、県庁舎新別館や市立図書館前の八尾邸跡から比べても一割程度もありません。原因としては生活空間でなかったことと、岬の教会のあとの糸割符会所、西奉行所の時に徹底して前の痕跡を消したものと考えられます。このことがこれからの活用に重要な選択を迫られるのではないのでしょうか？歴史的に確実な証拠となる書物、物件、資料がないので国の指定史跡の可能性は低いのでは？しかし石垣をはじめ土地の形状、出島との位置関係を考えると、日本でも一級の観光地になれる要素は十分にあると思われます。今回の石垣を先端に西側樺島町方面の石垣、東側裁判所、法務局の石垣へとポルトガル時代の要塞の姿が誰にでもハッキリわかる形はNHK[ブラタモリ]1回目に放送されたものです。

そこで発想をかえて、ベビオ・アマロ氏が「港市長崎におけるキリシタン施設に関する研究」で表しているサンパウロ教会や森崎宮を再現する。イエズス会に資料があるかも知れないが？また図面が残っている長崎奉行所西役所の一部を再現する。教会の建物の中にはかつてローマの町のようにと宣教師が報告した1620年ころの長崎の街の模型を置き、エキゾチックな長崎の街の姿を紹介しては如何でしょうか？他にもローマへ行った4人の少年使節の資料など展示しても意義あるでしょう。奉行所の建物の中には、江戸時代の踏み絵の様子や海軍伝習所、医学伝習所の資料も展示したいものです。コロナの時代、幕末長崎から広まったコレラのことや天然痘のことなどの資料展示も良いでしょう。

県庁第三別館については、あの優秀な長崎県庁設計部が大正2年に建てた残り少ない建築物で残すべき資産です。建物を耐震改修した後長崎御朱印船貿易博物館として活用すべきです。長崎市埋蔵文化財課が長年にわたり発掘してきた御朱印船時代の日本でも長崎にしかない遺物が大量に眠っています。長崎でしか作れない御朱印船貿易博物館を是非長崎に作ってほしい。因みに御朱印船貿易家の荒木宗太郎の3代目伊太郎から13代

目惣八郎春草までは我が築町の乙名をしていました。荒木宗太郎は妻をベトナムから連れて帰り、その縁でベトナム・ホイアンのまちでは毎年日本祭りが開催され長崎との交流を深めております。

それ以外の空間をどのようにするか？最初の頃の長崎の街を再現する。勿論確かな資料が残されていないので発掘された物と南蛮屏風で判断するしかないのかもしれない。花十字紋の瓦をのせた花頭窓の街並みを再現し、それぞれの家の中で土産品や特産品を販売する。カステラ、銀細工、ビードロ、鼈甲などなど、、、。或いはコーヒーや彼杵茶などを飲ませる。ポルトガル菓子、エッグタルトの専門店、、？

教会、奉行所、朱印船博物館は入場料をとる、各々の店は家賃をとる。長崎県はこの施設の全てをデベロッパーへ委託して月毎の料金をもらう。デベロッパーは入場料収入とテナントの家賃で収益をあげ、施設の宣伝、広告、管理費にあてる。長崎県はデベロッパーへ貸与することで初期投資を回収し維持管理費を抽出する。

今でもポルトガルへ行くと4人の少年使節の絵やアズレージョが残っているし、ベトナムや東南アジアでは長崎との交流の痕跡が残っています。長崎の人が知らない江戸初期の長崎の姿は外国に残っています。岬の教会、6ヶ町時代の長崎の街を再現して、日本中に二つとない長崎の観光施設とし新たな観光客を呼び込むことは長崎観光の目玉になることは必至です。

参照：1.金沢市 東山 ひがし茶屋街 2.熊本 熊本城桜の馬場、城彩苑 3.江戸ワンダーランド 日光江戸村  
ここで熊本の城彩苑を調べてみると、城及び城彩苑で平成29年度（2017）275万人の来場で725億円の売り上げ、平成30年（2018）281万人来場で735億円の売り上げを記録している。城彩苑だけでも平成29年119万人、平成30年105万人訪れている。駐車場としてバス47台、乗用車663台分を準備している。やはり、これ程の人数と売り上げを上げるにはインフラとして駐車場の整備は不可欠でありましょう。2016年の熊本地震以後だと考えると素晴らしい回復力です。そう考えると県警跡地は駐車場並びに施設のための事務機能、倉庫機能、或いは長崎県物産館等併設するような建物が妥当でないかと思われる。

『ポルトガル時代の長崎の街並み再現』は、日本中で長崎でしか作れない街並みだし出島の史跡とも関係がある施設ではないでしょうか？更にこの土地は平坦ではありません。旧県庁舎入口付近と江戸町公園側は4m程の高低差がありますし、出島に向かって傾斜地になっており上から見るように広い土地ではありません。しかしながら、出島側から見ますと立体的な街並みを見ることができます。出島から見ると右側石垣の上の小さな教会と左側奉行所の屋根の間に上から下に向かって花十字紋瓦をのせた家並みが連なっていく様子はまさに徳川時代前の長崎の街の姿ではないでしょうか？教会のステンドグラス越しに見下ろせる出島の風景も素敵でしょう。

産業の少ない長崎において観光産業は大切な産業の一つです。小樽運河も金沢、ひがし茶屋街も熊本城彩苑も、元々そこにあったものではありません。それぞれの街の人たちが観光地として作り上げたものです。あったものを見せるだけでなく、観光地として整備してきた施設なのです。奉行所の庭で県内の伝統芸能大会を行うとか、県内の物産を紹介するイベントを開くとか、教会で長崎のキリスト教関連遺産の紹介をするとか決して長崎市内の施設でなくオール長崎で取り組むべき課題だと思います。